

パソコンと通信は生涯学習をどう変えるか

◆対論◆ 山本慶裕VS西村美東士

「マルチメディア時代の到来」といわれてきたが、まだまだ見えそうで見えない、分からない部分が多い。パソコンとネットワーク社会に大きな期待を寄せる人たちがいる一方、不安の声も多々聞かれる。ほんとうのところ、パソコンとネットワークは、社会を人々を、どう変えてゆくのだろうか。

ネットワーク上に確固たる場所を築きつつ、「癒しのマルチメディア」の可能性を説く西村氏と、ブレゼンテーション用のツールとしてパソコンを駆使しながら、来るべきネットワーク社会に対しては「慎重肯定派」の山本氏。お二人の対論を試みた。

構成/文 高山さえこ

生涯学習の情報提供
システムの現状の問題点

西村 行政が行っている生涯学習の中央集権的な情報提供システムがあるのですが、アクセスが少ないので、担当者はいくら状況にあります。

山本 アクセス回数を増すには、どうした方がいいんでしょう。

西村 市民発信型にすればいいんです。だけど、それをしない。行政側は、変な情報を流したら困るということと、パソコンを持つていない人にとって不公平になるからという理由から、そうしないのだと思います。

それから、マルチメディアを活用して、その人の顔が見える、声が聞こえる、匂いを感じるといったコミュニケーションにする必要があります。

使われては惜しい情報と、使って欲しい情報

山本 けれど生涯学習の会議など、規制がない場所でも情報を出さない人もいますよ。価値のある情報は出したくないということもあるのではないのでしょうか。

西村 そんなことはないですよ。土地とか財産と違って、知の世界では、自分の知的生産がひとに使われると嬉しいという性質がありますから、

一方で、情報ネットワークが新しい競争社会を生み出しているともいえます。



山本慶裕
(やまもと・よしひろ)
国立教育研究所 生涯学習
開発・評価研究室 室長

情報ポランティアみたいな形が期待できる。

山本 それ、理想的にはわかるんですよ(笑)。でも具体的にね、論文などのケースでは勝手に使われては困るし、現にそういう事もたびたび起こるんです。著作権がどこまで適用されるのかという未解決の問題もあり、現状では情報リテラシー(読み書き能力)を持っていない人、他人の情報に対するモラルをもたない人がたくさんいるわけなんです。

西村 問題を経験しないとリテラシーは学習できない。それに業の成果は出さないようにして、そうじゃないポランティア的な部分に関して出していけばよい。

山本 それは、楽観的な見方ですね。でも、そんな楽観論でフォーラムを開いても、アクセスがないのはなぜか。これは行政だ民間だという問題でもないと思うんですよ。だって、民間のフォーラムもいっぱいありますが、アクセスがたくさんあるフォーラムもあるし、ぜんぜんないフォーラムもある。その差はどこからでてるのか。つまりは、面白いからじゃないか。そういうことになりま

それは行政側の、情報というもののは上から下へ与えるものだと思ってる。そういう情報社会観を持っているところにも問題があるのと違いますが。行政は、オンソライズ(權威づけ)された情報だけが価値があると思っ

西村 それは、ばくも同じ意見です。だから、もっとアマチュアリズムと人間の真実に基づいた市民発信型の情報システムをつくっていき

今の社会は、上下競争社会の価値観ですが、ネットワーク上にはもうひとつの部分、共感とか信頼とか、人間本来の潜在的な能力で、異質同士が共生する水平な空間をつくることを期待したい。たとえば、知の世界がそうかと思うのですが。山本 知的空間が水平で平等だというのは、ばくは幻想だと思います。

なぜなら、情報をたくさん所有していることは、新しい権力につながるんです。それに情報は売れるんですよ。その上これまでの歴史では、権力に近い人々ほど情報をたくさん持つ傾向があり、大衆ほど情報から遠ざけられていた。だから、知的空間には大きな不平等や障壁がある。そこから水平化を考えなければいけないと思います。

西村 そうですね。そういう意味では、確かに知の世界にも情報の世界にもバリアがある。たとえば、生涯学習そのものが、学歴の高い人ほどその後も継続して学んでいるという、こういう皮肉な事実がある。ですから、これからつくり出していく方向としての水平共生空間。それをどうするかですね。

マルチメディア・ネットワークは、知的水平空間となりうるか

山本 また、ネットワーク上には、ブライバシーの問題もあります。タレントだったら、自分のブライバシーを商品にしている面もあります。が、一般の人はそれを防ぎたいと思うわけでしょう。それをどれだけ守れるか。

西村 ブライバシーの問題となると、ふつう、その保護が大事になるわけなのですが、突出した空間、た

えばネットワーク上などにおいては、「自負でもあるブライバシー」というものがあると思うのです。自分の生きざまや関心などを、ボランティアの心で広めたいというのか。

山本 一方で情報ネットワークが新しい競争社会を生み出しているともいえます。たとえば、ホームページの存在が、情報を出せる人と出せない人をつくり出している。

西村 パソコン通信では、ROM(ロム)という言葉があつて、情報を読むだけの人をいいます。あまり良い意味では使われていません。もちろん、彼らの読む自由を奪おうとは誰も考えませんが、双方向にやりとりする関係にはなっていない。そうではなくて、「してもらう」と「してあげる」が対になっている「さわやかな依存関係」をネットワークに期待したい。レスポンス(反応)のやりとりこそパソコン通信の魅力なのです。「してもらう」ことばかり考えている人たちはかりだと魅力的な空間はつくれませんから。めざすのはやはり、相方向に受信する水平な人間同士の出会いで、そこから癒しや安らぎも生まれる。

山本 癒しというのはですね、やっぱり実際に会うのが、究極の癒しであると思いますが(笑)。恋人同志なんか実際に会って抱き合うわけだし。

西村 いや、ぼくももちろん、そう実感します(笑)。が、パソコン通信にもオフライン・ミーティングというものがあつて、ぼくはそれを「成熟化」と呼んでいるんですけれど、そのとつかりとしてパソコン通信が有効だといいたいのです。それに、書き言葉メディアだからこそわかりあうこともあるのです。

時間とエネルギーの節約と、しあわせの関係

山本 パソコン社会には、もうひとつ大きな問題があると思います。便利であるがゆえに、何が何でも迅速にと、時間とエネルギーを節約する方向にだけ、考えが向いてしまう。



西村美東士 (にしむら みとし)
昭和音楽大学
短期大学部助教授

「してもらう」と「してあげる」が対になっている「さわやかな依存関係」をネットワークに期待したい。

西村 それはありますね。だって、新幹線ができてしあわせになったかというので、そことはやはりはいえない。サラリーマンの出張では、新世界で一杯やれなくなつて、結果的に過重労働を強いられる(笑)。

かつてのような合理主義社会は終わったわけですから、癒しや相互受容の部分に目を向けていきたい。山本 それからね、ぼくは生涯学習のキーワードといわれている「いつでも、どこでも、だれでも」というのにも、ちょっと疑問があるんですよ。

西村 なんてなんで(笑)。山本 「だれでも」というのはいいと思うんです。けれども、「どこでも」とか「いつでも」というのはどうでしょう?

たとえば、どのまちにも「このまちにはこれ」という地域固有の価値があるでしょう。それを認めないのは面白くない。「どこでも」「いつでも」という横並び思想が固有の価値を平準化してしまう。

西村 なるほど。何か話し足りない気分ですね。またひとつ、場所を変えてやりましょうか(笑)。